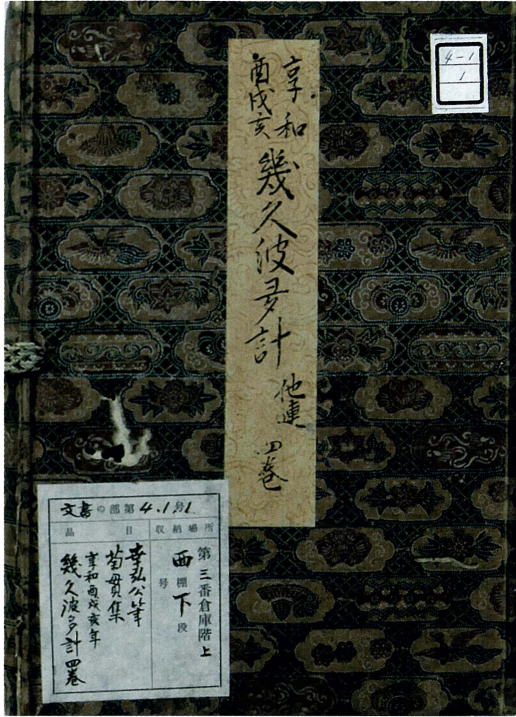
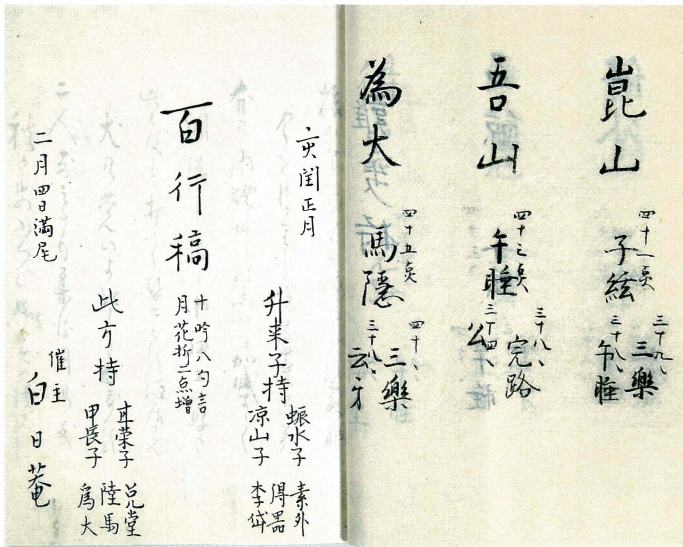
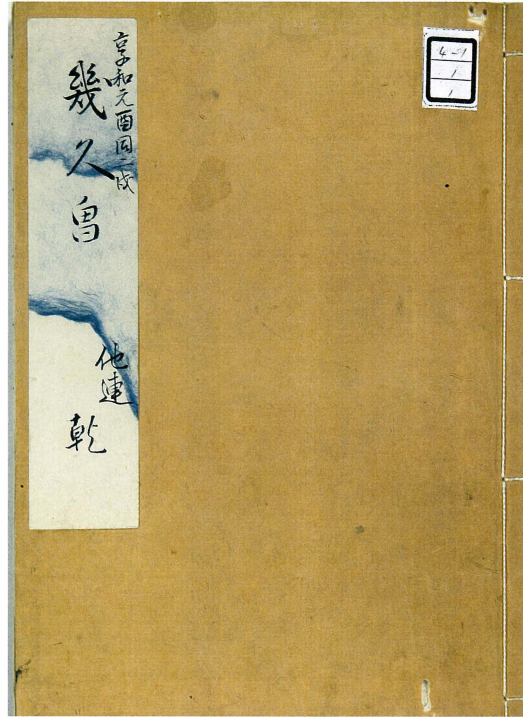


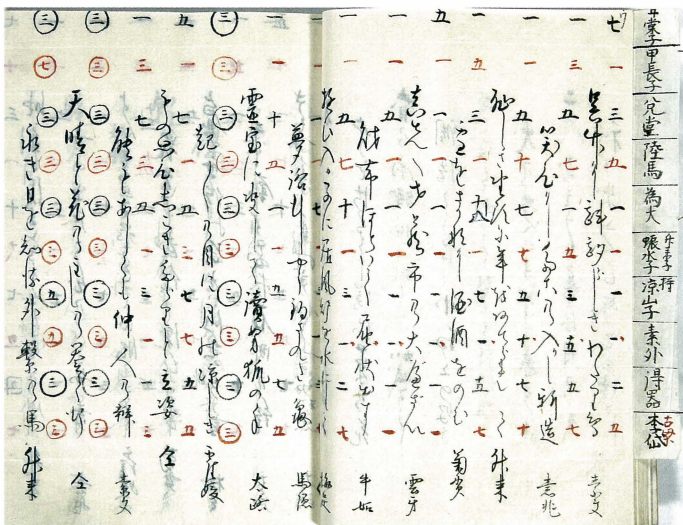
文4-1-1『菊島』帙（4冊入り）



文4-1-1『菊島』表紙と題籤



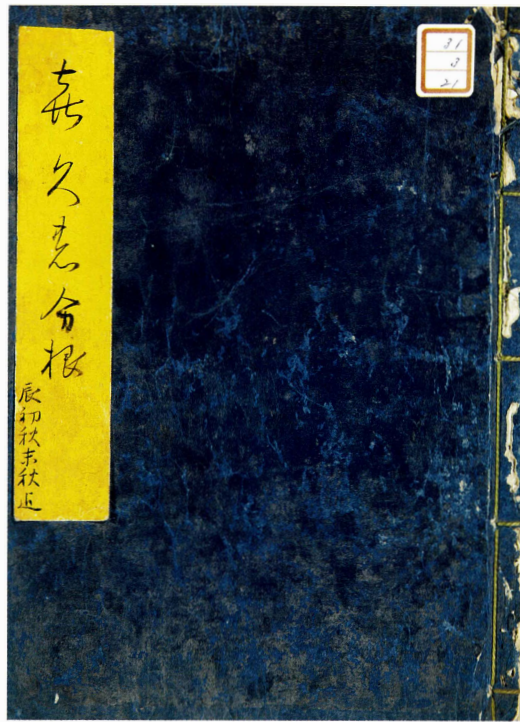
文4-1-1『菊島』1巻目の百韻の句上と2巻目の百韻の表紙



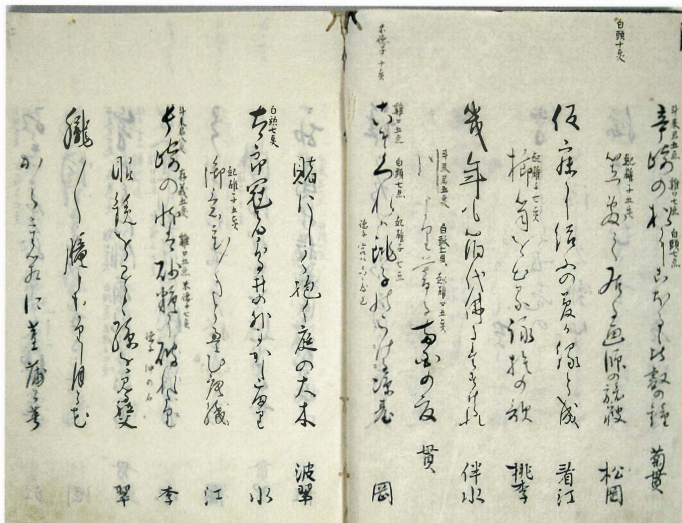
同2巻目の百韻の初折の裏



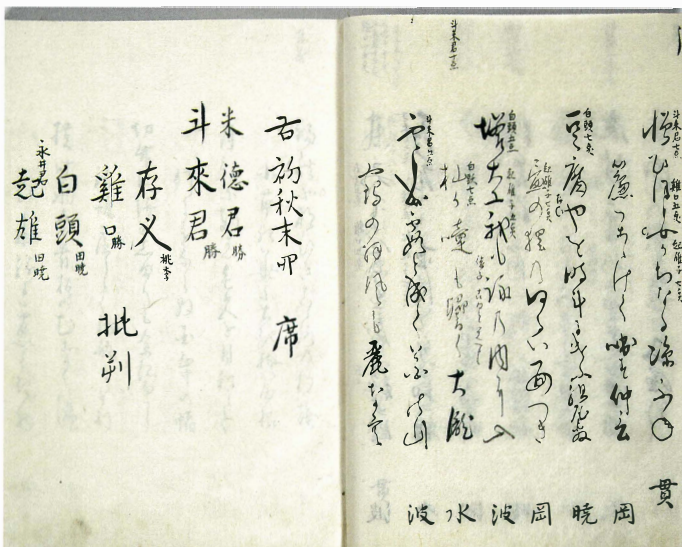
典籍31-3-21『菊の分根』表紙



同上、第1巻目の百韻の初折の裏



同、名残の折の裏と奥書



『菊の分根』（「松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧について」参照）

# 松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧活動について

— 安永年間を中心として —

平林香織

## 一 はじめに

松代藩第六代藩主真田幸弘は、第五代藩主信安の継室子で、元文五年（一七四〇）、松代で生まれた。信安の急死により、宝暦二年（一七五二）十三歳で家督を相続する。寛政十年（一七九八）五十八歳で致仕し、文化十二年（一八一五）、七十六歳で没した。菊貫・象磨・白日庵等の俳号を持つ大名俳人として早くから知られていたが、最近になって、幸弘の文芸資料の本格的な紹介が行われるようになった。

はじめで紹介された幸弘の文芸資料は、玉城司・伊藤善隆氏による宝暦十二年（一七六二・二十三歳）の句入り紀行『旅つゝら』である<sup>(1)</sup>。続いて、両氏は、文化九年（一八一二・七十三歳）の湘南・箱根への旅を記した和歌・句入り紀行『青葉蔭』を紹介した<sup>(2)</sup>。その後、井上敏幸・西田耕三氏らが、科学研究費補助金基盤研究（B）「近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び八諸芸に関する研究」（課題研究番号17320040 二〇〇五～二〇〇七年度、研究代表者井上敏幸）により、膨大な文芸資料の調査を行った。その成果として井上氏らは、幸弘四十歳から六十歳までの賀集を紹介した<sup>(3)</sup>。玉城司氏による真田宝物館所蔵の一枚摺の紹介や、井上敏幸氏による幸弘追善句集『ちかのうら』の紹介もある<sup>(4)</sup>。

井上氏らの共同研究を継承するかたちで、幸弘の点取俳諧活動に焦点を

絞った共同研究がスタートした（科学研究費補助金基盤研究（C）「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧の研究」課題研究番号22520252 二〇一〇～二〇一二年度、研究代表者玉城司）。これは、真田文芸資料が大変貴重な文化資料であることに鑑み、広く社会に情報公開していくことを念頭に置いて行われた。

この共同研究では、真田宝物館との共催により、年に一回「真田フォーラム」を長野市で開催した。講演会や資料調査を行い、研究メンバーが情報交換・意見交換を行いつつ、真田文芸資料を広く一般の方々に紹介した。その様子は「真田フォーラム2010」「同2011」「同2012」に記録されている。また、成果の一端に、玉城司「松代藩第六代藩主真田幸弘の文芸―漢詩・和歌・俳諧―」、平林香織「松代藩主・真田幸弘の文芸活動―和歌と俳諧―」、伊藤善隆「真田幸弘と大名俳諧」がある。さらに、アーカイブ構築という観点から、真田宝物館の全面的な協力を得てウェブサイト「松代藩第六代藩主真田幸弘の文芸」<sup>(5)</sup>を立ち上げた。本稿で言及する幸弘関連の資料の多くをこのサイトで確認することができる。

本稿は、以上の研究成果をもとに、幸弘文芸資料全体を整理し、その中で、幸弘の安永年間の俳諧活動の実態について、幸弘と交遊のあった大名俳人の日記を参照しつつ報告するものである。

## 二 幸弘文芸資料

まず、真田家文書のうち、幸弘関連の文芸資料の全体像について確認しておこう。これらは現段階での資料であり、今後の調査によって内容・数量とも変化する可能性がある。幸弘文芸資料のなかで、現在所在が明らかとなっているものは、左記のとおりである。真田宝物館以外に伝来するものについてのみ所在を括弧内に記した。それ以外はすべて真田宝物館所蔵である。

### 1 和歌資料

#### ①和歌詠草（30点）

『花洛の草結』（年未詳）、『和歌詠草』19冊、岩下清酒編和歌遺稿集

（写本。題簽なし）2冊

「御和歌詠草折紙」7枚、日野資枝ゆか宛書簡1通

#### ②師弟関係資料（3点）

「幸弘和歌許状誓紙」（国文学研究資料館）「公御自詠岡部衛士加茂真

淵点」（国文学研究資料館）、『天真院様御歌京都日野家より御点引』

「二条家より来題」2通

#### ③短冊 真田宝物館・国文学研究資料館に多数。

### 2 俳諧資料

#### ①点取俳諧書 169冊

『菊之分根』9冊【内訳―百韻102巻、二百韻4巻】

『菊島』121冊冊【内訳―百韻489巻、二百韻7巻、三百巻3巻、前句付

2巻】

『連月定会百員』24冊【内訳―百韻108巻】

『年篋』<sup>10</sup>4冊【内訳―百韻2巻、百十六句1巻、二百韻1巻】

『百八十韻』1冊（1巻）、『菊合百八十四句』1冊（1巻）、『鶉合三百韻』1冊（1巻）

『二万句』【内訳―第三―第十（第一・第二欠本）800巻】

#### ②発句集 3冊

『水か、み』三冊のうちの天巻（酒竹文庫）【地巻『句藻』米翁句集、

人巻『雪月花』江戸座宗匠画入句集】

『菊貫公句稿』（広島大学福井文庫）

『句集』（仮綴）

#### ③付合集 1冊

『春季発句合』『菊の筵』（国文学研究資料館）

#### ④高点句集 21冊

『詭遇駟』初編・二編・四編3冊（二編欠本）、『高点句御書留』15冊

『万句入句控』1冊、『評物定会入句』1冊、『手前定会入句点附』1

冊

#### ⑤加點控帖 4冊

『引墨到来覧』4冊

#### ⑥俳諧一枚摺

真田宝物館蔵7枚【内訳―名月1枚、良夜2枚、後月3枚、秋興1

枚】

早稲田大学図書館雲英文庫蔵14枚【内訳―歳旦10枚、春興1枚、後月

1枚、紅葉俳諧1枚、霜天俳諧1枚】

個人蔵8枚【内訳―春興5枚、夏興1枚、良夜2枚】

#### ⑦点帖15冊（真田宝物館11冊、大阪府立大学3冊、松宇文庫1冊）

#### ⑧追善集『ちかのうら』1冊

#### ⑧点印 62点

#### ⑨文台 大島蓼太裏書。裏書には従五位下から従四位下への位階昇進の祝

いの記念として制作、とある。

⑩俳諧各座宗匠投句箱・宗匠名札

⑪短冊 真田宝物館・国文学研究資料館に多数

3 賀集—年賀集と祝賀集。

①年賀集

四十賀『むら竹』『にひ杖』

五十賀『わかみとり』

六十賀『千とせの寿詞』上・中・下 『御ことほきの記』『耳順御賀日記』

七十賀『千とせの寿詞』上・中・下 『御年賀御祝儀一許』『御ことほきの記』『佳苑篇』『侑觴辞』『千世のまつ原』『ひらのこずゑ』『高砂のみどり』『すみの江のかげ』

短冊約<sup>2,000</sup>点

②祝賀集

海津城双鶴飛来祝賀『ともづる』上下 付本『松霍御祝詩歌俳諧名籍記』

竹千代生誕御篋刀役祝賀『むらたけ』付本『むら竹の山彦』

日野資枝歌道入門祝賀『はしたて』付本『橋立秋千種』

③杖・杖袋 遊歌が幸弘六十の賀に寄せて寄贈したもの（杖袋に和歌の刺繡）。遊歌筆懷紙『杖の歌』。その他遊歌によって和歌が書かれた杖袋1点

4 紀行

①句入り紀行『旅つゝら』1冊

②幸弘自筆紀行絵巻『湘南絵巻』（卷子本1本）

③小野正應画・箕田牛山筆紀行絵巻『青葉蔭』（卷子本2本、冊子本1冊）

④旅日記『青葉蔭』1冊

5 書画

①書 『風鳴』『蘭亭記』『五言絶句』『竹外鳥窺人』『七夕の和歌』等多数

②画 『春景山水画』

右の幸弘文芸資料を年代順に一覧にしたものが後掲の別表1である。

真田宝物館所蔵資料と国文学研究資料館寄託資料等をあわせた真田文芸資料全体を整理・分析するための課題は多い。また、未調査ながら致道博物館酒井家目録には、幸弘が連衆となっている百韻四巻、歌仙一卷、評点紙一点の記載がある。各地の大名資料の調査が進み新たな資料が発見される可能性は高い。

幸弘文芸資料に関する現段階の課題は次のとおりである。

1、資料の翻刻

発句集の一部と賀集については翻刻が終わっている。点取俳諧集については、地元長野市の方々が「真田連句をよむ会」において『菊の分根』の翻刻を進めており、その成果を『松代』24号（二〇一一・三）以降に順次掲載している。『菊島』の翻刻は、二〇一二年九月に発足した真田文藝研究会（代表玉城司）が中心となって三百巻ほどを終えている<sup>12</sup>。点取俳諧集の翻刻を継続するとともにその他の文芸資料を順次翻刻する必要がある。

2、内容の調査・研究

幸弘文芸資料の中でも、多くの点取俳諧集を含む俳諧資料の意義は大きい。その内容を詳細に検討することによって、従来その全体像が

かめていなかった大名俳諧の内実が明らかになるだろう。

### 3、データベースの構築

幸弘のみならず、真田家全体の文芸資料のデータベース化が急務である。また、真田家に関係した文化人のデータベースも必要であろう。

さらに、幸弘俳諧資料から明らかな、俳諧興行の開催日・開催場所・催主・連衆・点者・高得点者・高得点句のデータベース化も進めなければならぬ。

### 4、他の資料との相関研究

真田家の資料と他の大名家資料や江戸座俳諧資料との相関関係について調査することによって、俳諧史や文学史全体全体に大名文芸を位置づけることができる。

## 三 幸弘の点取俳諧集について

幸弘の文学活動は、伝来資料により大きく三期に分けられる。第一期は、宝暦十二年（一七六二）の『旅つゝら』を皮切りとする天明八年（一七八八）頃まで。俳諧活動に熱心であった時期である。第二期は、主として寛政元年（一七八九）から寛政十年（一八〇一）頃まで。日野資枝に歌道入門を果たし和歌活動に熱心であった時期である。第三期は、寛政十年（二七九八）の致仕後から亡くなる文化十二年（一八一五）までの俳諧活動に再度熱心な時期である。

第一期の裏付けとなる資料が点取俳諧集『菊の分根』、江戸座俳人菊堂主催『総評一万句』、高点句集『詭遇駟』、他の連衆の俳諧興行への加点点録集『引墨到来覚』である。そして、第三期の俳諧活動の実態を示す資料が点取俳諧集『菊島』である。（巻頭グラビア写真参照）

つまり、第一期の『菊の分根』と第三期の『菊島』、二種類の点取俳諧集が現存するのである。両者の書誌的な違いについて簡単にまとめると、

	各巻の表紙 (各巻1丁目の記述)	点者・点数	点者の評語	句上
菊の分根（青色表紙）	なし。各巻は発句ではじまる。	点者・点数を頭書または句の右側に併記	必要に応じて句の左側に点者名の略称とともに記す。	なし
菊島・定会百韻（砥粉色表紙）	あり。各巻の最初に、巻名・日時・場所・主催者・点者・連衆を明記	一巻の表紙裏に点者名を書いた付票を貼付。点数は、句と句の間朱筆を交互に使うことによって一行表記	なし	上位三名の連衆・点数・点者・誰の「持」であるかを記載

表1 『菊の分根』と『菊島』の形態上の違い

上の表1のようになる。

『菊の分根』は31ではじまる分類番号を持ち、『菊島』には4ではじまる分類番号を持つものと31ではじまる分類を持つものが混在する。真田家資料の整理の過程については、原田和彦氏や山中さゆり氏によって調査・研究が行われている<sup>13)</sup>。真田宝物館の資料は何度か出入りを繰り返しており、現在の分類番号がいつの段階のものなのかは不明だという。目録には「典籍」と「文書」という分類語がある。「典籍」には写本あるいは刊本が多く含まれ、「文書」には一紙ものや編纂された記録・日記の類、また短冊も数多くふくまれているが、区別があいまいなものもある。幸弘関係の資料については、4ではじまるものが「文書」として分類され、31ではじまるものは、「典籍」として分類されている<sup>14)</sup>。

『菊の分根』には、しばしば行間に点者の氏名を記した評語がある。また、大和郡山藩主を致仕した柳沢信鴻（一七二四—一七九二）俳号

米翁)の『宴遊日記』をみると、安永三年(一七七四)から安永七年(一七七八)にかけて、幸弘に関する俳諧関連の記事が頻出し、幸弘が熱心に俳諧指導を受けている様子がわかる。したがって、この時期は、どちらかというと俳諧について学ぶ立場だったといえるだろう。

一方、文化年間の点取俳諧集『定会百韻』『菊島』は、巻ごとの表紙や句上が整い、記載方法が統一されている。各巻の表紙に興行主、日時、連衆、点者が記され、点者ごとの加点の実態が一覧でき、句上には点者ごとの高点者上位三名が得点数とともに記されている。表紙には「百韻」の文字が印刷された用紙が用いられており、点取俳諧集専用の用紙を発注していたと思われる。毎月の定例会のほかに、「菊合」「鶉合」などの句会も行っていたことがわかる。俳人大名としての円熟期といえそうである。

4ではじまる分類番号をもつ点取俳諧集には幸弘の法号「天真院」が記された「天真院様御筆」という帳票が帙に貼られている。これがいつの段階で貼られたのかは不明であるが、ひとまとまりにして桐箱に保管されているため、保存状態が良い。

なお、『菊島』には百評を最大として、七十評、五十評のものがあり、幸弘と交遊のあった江戸座俳人や大名俳人が集結している観がある。評数が多い場合は、付票に点者を書ききれないため、同じ百韻を二度、三度書いて、点者の付票を入れ替えて点数を記載している。これらを手作業で集計するためには大変な労力を要したはずである。

試みに、A享和二年(一八〇二)一月二十五日興行の百韻とB同三年二月四日に満尾した百韻の各句に付された点数をエクセルに入力し集計した値と、句上に記載された点数とを比較したのが後掲の別表2である。

順位についてはほとんど一致しているが、一部順位の入れ替えが行われているものもある(網掛け部分)。また、点数については、一句一句の加点をエクセルに入力して集計したものと、句上に記載されているものと

一致するケースは少ない。

Bの百韻の場合、表紙に「月花折二点増」とあり月句・花句・折端句に治定された連衆の合計点に二点が加点されていると思われる。その場合、それぞれの句の右側に付された点者の点数が丸数字になっている。したがって、月句・花句・折端句に治定されている場合は集計後の数字にその分を加点して集計した。Bのような「二点増」の記載がないAのような百韻の場合は、「月花折」はすべて執筆が句を付けている。それ以外の加点ルールについては不明である。

これら大量の点取俳諧集は、俳諧資料としてだけでなく、言語資料、歴史資料としても多くの情報に満ちている。さまざまの立場の人々が、よりの多くの観点でこれらの資料を分析することによって、見えてくるものは多いはずである。

前節で示した「真田幸弘の文藝」サイトでは、今後、幸弘の点取俳諧集の写真と翻刻を順次アップデートする予定である。点取俳諧集のページは、人名と語彙についての検索機能を備えている。

#### 四 安永期の点取俳諧活動について

次に、第一期の点取俳諧活動期のうち、安永年間の活動状況について考えてみたい。以下、幸弘の俳諧活動について言及する際には、俳号菊貫を用いることとする。

真田宝物館に伝来する菊貫の点取俳諧集のもっとも古いものは宝暦十三年(一七六三)九月から翌明和元年(一七六四)七月までの興行を記録した『菊の分根』である。これは、菊貫が参勤交代の旅について記した『旅つゝら』と同時期のものである。『旅つゝら』は、菊貫二十三歳のときに、江戸を出立してから松代に到着するまでの参勤交代の旅の句入り道中記である。このころから本格的に点取俳諧をするようになっていったと思



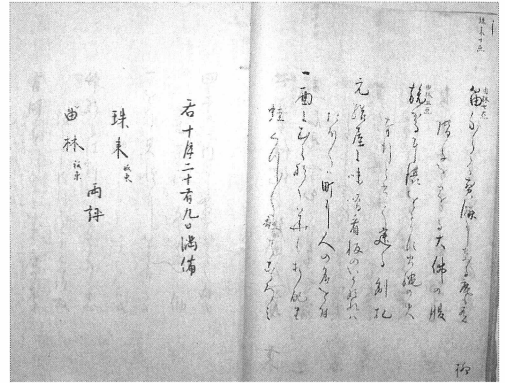
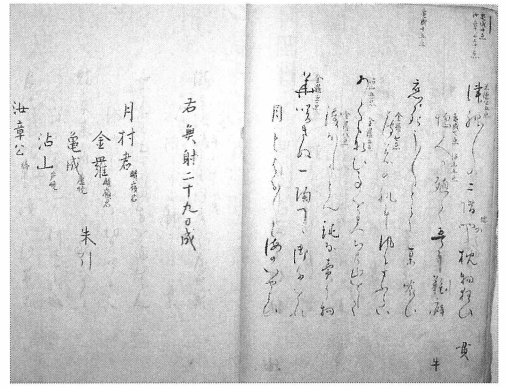


写真1 『菊の分根』宝暦13 (1762) ~明和元 (1763)

われる。

右の『菊の分根』は、原題箋が剥落し、『菊の分根』と書かれた後題箋が貼られている。原題箋は見返しに貼付されており『菊の分根 地』と書かれていることから、天巻、人巻に相当する点取俳諧集があったことが予想される。全部で十六巻の百韻を掲載するが、第八の百韻の最後に「宝暦<sup>甲</sup>初春晦成」と書かれており、宝暦十四年(一七六四)の正月の座であることがわかる。第一の日付は「無射二十九日」となっている(写真1参照)。この一冊には宝暦十三年九月から翌明和元年十一月(六月に改元)までの百韻が掲載されている。

その後間が空いて、次に古い点取俳諧集は、明和九年(安永元年・一七二二)の『菊の分根』である。したがって、現在宝物館には伝来してはいないが、現存する宝暦十三年~明和元年の『菊の分根』と明和九年(安永元年)の『菊の分根』の間の七年間の点取俳諧を記録した『菊の分根』もあったのではないか。今後の出現が期待される。

また、現在のところ点取俳諧集が存在しない安永二年までの『菊の分

	年号	興行数	月平均	備考
『菊の分根』	宝暦13	7	1	
『菊の分根』	明和元年	9	2.7	
『菊の分根』	安永元年	25	2.1	
『菊の分根』	安永2年	35	2.9	
『菊の分根』	安永3年	29	2.4	総評一万句を含む
『詭遇駟』	安永4年	62	6.9	欠本のため、9か月分
『詭遇駟』	安永5年	48	8	欠本のため、半年分
『詭遇駟』	安永6年	63	5.25	
『詭遇駟』	安永7年	57	4.75	
『詭遇駟』	安永8年	12	1.2	11月以降記載なし
『詭遇駟』	合計	347		

表2 安永年間菊貫参加句会

根』と享和元年からの『菊島』の空白期に、菊貫は点取俳諧を行っていないか。そののではない。それを示す資料が、安永四年(一七七五)から安永八年(一七七九)までの高点句集『詭遇駟』である。『詭遇駟』は、菊堂(雨夜庵)をはじめとする江戸座俳人ら、大和郡山藩第三代藩主柳沢保光(俳号米徳・月村)をはじめ

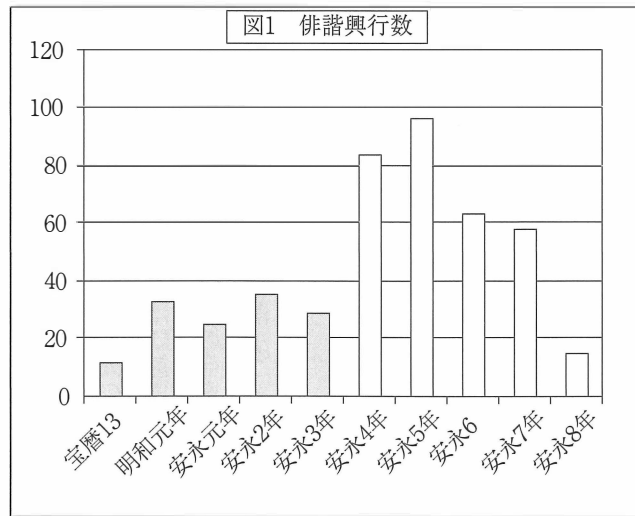
とする大名俳人らの月次定会句会に参加した折の自身の高点句を抜き書きしたものである。

『詭遇駟』は初編から四編まで四冊あることが『真田書籍台帳』(真田宝物館)に書かれているが、現在、二編が欠本となっている。『菊の分根』九冊と『詭遇駟』三冊から拾った安永年間の点取俳諧興行数をまとめる」と、表2のようになる。

空白期間があるため、一か月平均の回数を算出し、頻度を調べた。『菊の分根』は菊貫主催の句会の記録であり、『詭遇駟』は菊貫が他の宗匠や大名俳人主催の句会に一座したときの高点句集である。したがって両者を



単純に連続して考えることはできないが、参考までに表2から年間の俳諧興行数を算出しヒストグラムにしたものが図1である。



これを見ると、『菊の分根』からわかる宝暦十三年～安永三年までの興行数（ヒストグラム塗りつぶし部分）は、ほぼ横ばいである。一方『詭遇駟』に記載される安永四年から安永八年までの菊貫参加句会の数（ヒストグラム白抜き部分）は安永五年をピークとして減少している。実際には、『菊の分根』が現存しない期間（ヒストグラム白抜き部分）にも菊貫主催の句会が行われていた可能性は高い。また、安永四年

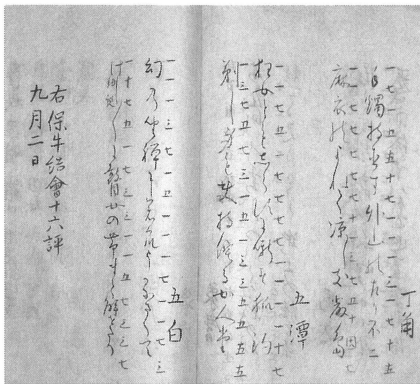
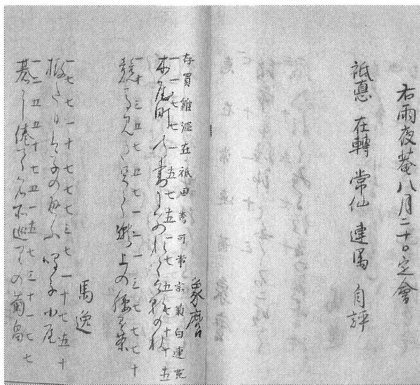


写真2 『詭遇駟』三編

以前（ヒストグラム塗りつぶし部分）に菊貫が他の宗匠・大名俳人主催の句会に一座したことがあったかもしれない。菊貫が他の宗匠や大名俳人主催による句会に参加する頻度が、安永五年以降減少し、自ら主催の句会に重点が移っていった可能性がある。

いずれにせよ、『詭遇駟』は、以上のような句会参加数だけでなく、菊貫の高点句、江戸座俳人および大名俳人との交遊関係について知るための重要な資料といえる。

また、『詭遇駟』からは菊貫が句会でさまざまな俳号を用いていたことがわかる。従来、菊貫の俳号としては、白日庵・攀月楼（観）・雙雀楼・五白楼・天真園・籟月庵、象磨（丸）・吹旭・馬逸が知られていた。『詭遇駟』では雨夜庵での定会で「馬逸」と「象磨」のほかに「丁角」「五潭」「五白」を用いていたことがわかる（写真2参照）。

### 五 真田幸弘（菊貫）と酒井忠以（銀鷺）の交遊

安永期の俳諧活動が盛んであったことは、他大名の日記からもわかる。

真田家文書には約二千冊の日記が含まれており、国文学研究資料館に『家老日記』『御側御納戸日記』『御目付日記』『勘定所元々日記』『郡奉行日記』など、真田宝物館には『監察日記』『留守居方日記』『奥日記』が伝来する。そのうち、幸弘の文芸活動について記しているのは、致仕後の『御側御納戸日記』九冊である。寛政十年（一七九八）から文化八年（一八一）のものがある。

残念ながら安永期の菊貫の俳諧活動について記された日記は真田家資料には現存しない。しかし、幸いなことに、同時代の大名俳人である柳澤信鴻（以下、米翁と表記）の『宴遊日記』（安永二年～一七七三）～天明五年（一七八五）～、姫路藩主酒井忠以（一七五六一～一七九〇）号宗雅、俳号銀鷺、官位雅楽頭、以下銀鷺と表記）の『玄武日記』（安永五年～一七

七五〇〜寛政二年（一七九〇）が残されている。これらの記事には俳号菊貫の名を記した記事が多く含まれる。

『宴遊日記』の菊貫関連記事については山中さゆり氏による調査がある。<sup>15</sup> また本稿「一 はじめに」に示した拙稿では、『宴遊日記』に書かれた菊貫の記事について考察した。『宴遊日記』の中で、菊貫以上に頻繁に米翁のもとに出入りしている大名が、銀鷲である。『宴遊日記』の記述からは、銀鷲もまたこの時期点取俳諧に熱心であったことがわかる。そこで本稿では、『玄武日記』における菊貫記事について考察したい。

現在、銀鷲は、酒井宗雅という名の大名茶人としてよく知られている。景山純夫氏は『玄武日記』の記載について次のように述べている。<sup>16</sup>

宗雅には『玄武日記』と名付けられた日記があり、一七七六（安永五）年から亡くなる一七九〇年まで書き続けられます。この一七七六年の日記を見ると、ほぼ毎日のように俳諧仲間と手紙をやりとり、添削を受け、時には連句の会を持っていたことがわかります。その仲間には伊達重村（仙台藩主）と真田菊貫（松代藩主）などの大名達がい  
ます。

宗雅が、俳諧や茶の湯以外に楽しんだものとして、絵と能があります。（中略）

俳諧を楽しんでいた宗雅が茶の湯に興味を移す契機となったのは、一七七八（安永七年）三月から四月にかけて行った有馬温泉での湯治であったと考えられます。

右に書かれる通り、『玄武日記』においては、安永期に多かった俳諧記事が、天明年間にはぐっと少なくなっている。安永八年（一七七九）五月に大名茶人として名高い松江藩第七代藩主松平治郷（一七五一―一八一八、不昧）と日光諸社堂修理の役を行って以来、急速に茶の湯に熱中していく。

大名茶人となる以前の銀鷲の俳諧活動の詳細についてはまだ明らかにされていない。

本稿末尾に『玄武日記』の菊貫関連記事を抜粋した。<sup>17</sup>

菊貫関連記事が最も多いのは、安永五年（一七七六）の四十五回である。その後は、それぞれが参勤交代により国元へ帰る期間があったりして、安永六年（一七七七）十五回、安永七年（一七七八）十三回となっている。

記事では「手紙」とだけ書かれる場合も、すべて「菊貫」という俳号による記載である。『玄武日記』では、政務に関する記述では官名「真田伊豆守」に基づいて記載される。また、多くの「菊貫より手紙」といった言い回しが「米翁」や他の大名俳人の俳号と併記されていることから、「手紙」の内容が点取俳諧関連の記事であることは間違いないだろう。菊貫の記事の前後には、「五鳳（回し請書出来遣ス事）（安永五年二月二十日）、「祇井より手紙、巻来<sup>ル</sup>、即酬・点」（同年二月二十六日）といった他の大名俳人との点取俳諧に関するやりとりの記事が頻出する。

ちなみに、『玄武日記』に登場する大名俳人には、「祇井」（出羽国松山藩主酒井忠崇）「秀井」（三河国西尾藩主松平乗寛）、珠成（越後国三日市藩主柳沢里之）、「米徳」（大和国郡山藩主柳沢保光）、「三花」（摂津国浅田藩青木一貫）、「孔阜」（播磨国明石藩主松平直之）、「甘棠」（伊予国今治藩主松平定休）、華裡雨（肥後国熊本藩松平重賢）、五鳳（豊前国小倉藩主小笠原忠苗）がいる。彼らは、とりもなおさず、菊貫と交遊のあった大名俳人（後掲別表3参照）でもある。

日記の中でも、安永六年（一七七六）、銀鷲が国元姫路に赴く参勤交代の旅の記述は、注目に値する。十一月二十三日の記事である。多くの大名が送別の和歌・発句を寄せている。菊貫の句は、「かちよりそゆく播磨路に趣き給ふその国の守の首途を寿ぎまゐらせて」という前書のある「松の

春むかへに君が旅出かな」という句である。また、米翁も「御旅すがらの快晴をいのは常の事ながら」という前書の「御紀行の骨や初雪夕しくれ」という発句を寄せている。

さらに、姫路に着くまでの道中の記述が非常に詳細である。品川を立出し姫路に到るまで、みごとに紀行文となつてゐる。伏見から大坂へ下る淀川の船の中では五十韻の船中俳諧を行つたり、行く先々で和歌漢詩俳句が詠まれたりしている様子が書かれてゐる。旅の記述は「城着の後雪ふりければ／豊年の貢の雪を土産かな」と祝意を込めた句で終わつてゐる。連歌俳諧がめでたい挙句で終ると同じように、姫路城に無事着いたことを寿いでゐる。発句を詠んだり連句興行をしたりしながらの旅として記述されるのは、この安永六年の旅だけである。このあとの天明年間の参勤交代の旅では句会ではなく茶会を行つた記述が登場する。この点からも銀鷺が次第に点取俳諧から離れて行つたことがわかる。

『玄武日記』の参勤交代の旅の記述は、菊貫の参勤交代の旅を記した句入り紀行『旅つゝら』と比較して考えると興味深い。『旅つゝら』は菊貫二十三歳、三回目の帰藩、『玄武日記』安永六年時銀鷺は十九歳、二回目の帰藩の道中を記したものである。それぞれ俳諧に夢中の若き藩主が、道中の歌枕や故人のよすがに目をとめ句作をしながら参勤交代の旅に望んでゐる様子を伝えている。

ところで天明四年（一七八三）、菊貫は、痔疾のために参勤交代の旅程を難所の碓氷峠を通らず中山道を行くルートに変更したいという願を幕府に出している。<sup>18</sup>『玄武日記』後半からは銀鷺もまた痔疾に悩まされてゐる様子がわかり痛々しい。また、菊貫は、晩年の湘南への紀行『湘南絵巻』跋文において、参勤交代の旅については「道すがら目にあきにし事のみ多く」と書いている。三十六歳で亡くなった銀鷺は生涯に四回しか江戸と姫路を往復していないが、菊貫と同じように銀鷺も痔疾が深刻化してからの

参勤交代の道中は心躍るものでなくなつていったと思われる。そういう意味でも『玄武日記』安永六年の旅の記述と『旅つゝら』は、大名俳人の句入り紀行として貴重なものである。

ここで、菊貫と銀鷺が俳諧を学んだ米翁周辺の資料を見てみよう。菊貫の松代下向を米翁が大変さみしがつてゐる様子が、『宴遊日記』に書かれてゐる。『宴遊日記』も江戸にゐる米翁が見送る側として餞を行つてゐることを伝える。その様子は、米翁の発句集『蘇明山荘発句藻』からもうかがえる。「離別部」には、多くの大名への餞の句が収められてゐる。菊貫が国元へ赴くときの送別句は三句掲載されてゐる。<sup>20</sup>

菊貫、信濃路に旅だち給ふ。予も程なく同じ山路を分ぬれば

花薄君が枝折の御あとから

菊貫帰藩に

鷹鹿虫秋に富たり御旅日記

神無月朔日、菊貫、松代に旅だちたまふ時

日和風神に連だつ首途かな

それぞれ別の参勤交代の折の句と思われる。致仕後は染井山荘に住んで参勤交代の旅とは無縁となつた米翁が、後進の若い藩主たちを激励し、その旅程の無事を祈つてゐる様子が伝わる。

『蘇明山荘発句藻』には、銀鷺への送別句は収載されていないが、銀鷺娘への錢別の句が載る。「銀鷺の姫が城へ赴給ふ時」という前書の「御句もさぞのお泊や九月尽」の句である。また、「春部」には、銀鷺に桜の花に添えた句を送られた、米翁の返句が収められてゐる。

銀鷺の許より、吉野の種とて桜の花を筒にいけて  
先達に見て貰ひたき桜哉 といふ句を贈られければ

御秘蔵を木守かつてや桜がり

銀鷺に「先達」と挨拶される米翁が、吉野の桜を贈られた喜びを「御秘

蔵」と返しているところに、敬愛に満ちた二人の関係を読み取ることができさる。

次に、『玄武日記』における俳諧一枚摺の記述に注目してみよう。『玄武日記』安永五年（一七七六）、安永六年（一七七七）の八月十五日前後にはそれぞれ「ことくすりもの一枚あるいは二枚ヲおくる」、「名月のすりもの左之通遣ス」とある。前節二の文芸資料一覧に示したように、菊貫の俳諧一枚摺として、多くの月に関するものが残されている。『玄武日記』の記事からも点取俳諧活動において、大名俳人たちが名月の俳諧一枚摺の交換を行っていた様子がわかる。大名の俳諧活動において、俳諧一枚摺の制作・贈答は重要なものである。

以上のように、日記は句の贈答をしたり摺物を交換したりして、雪月花の風情を共感しあい、ときに別れを惜しみ、また旅の安全を祈り合う大名俳人たちの様子を伝えている。米翁を中心として彼のもとに菊貫や銀鷺が楽しく出入りして交遊を結んでいたことがわかる。

菊貫側の資料に掲載される銀鷺の俳諧活動もある。『詭遇駟』には、安永七年（一七七八）閏七月十四日と八月十四日の銀鷺主催の句会に参加したときの高点句が書かれている。また、安永八年（一七七九）八月には「銀鷺子良夜催」の高点句が書かれている。残念ながら、『玄武日記』の記載にこれに相当するものは見当たらない。

しかし、安永八年（一七七九）になると、『玄武日記』からは「菊貫」の文字が消え、「真田伊豆守」として政務上の記事に名前だけが列挙されるようになる。

では『玄武日記』から「菊貫」の文字が消える安永八年以降、銀鷺は俳諧活動を行っていないのだろうか。次の記事は、菊貫とも交遊のあった「細川越中」（熊本藩主細川重賢へ一七二二—一七八五、俳号花裡雨）関連の記事である。

安永八年  
十月

八日 四半時過出宅、着用平服、細川越中守へ相越、終日誹諧、歌仙満尾、  
連如左

華裡雨

亭主越中との

秀井

松平和泉守

餅字

小坂長春

了因

宝生新之丞

宗匠

谷口鶏口

北村葵足

七吟各五咄なり、帰宅暮六半時なり

天明二年

三月

廿三日 九半時過出宅、細川とのへ相越、相客和泉ノ大学、誹諧有之、平服  
に而相越、帰宅袴はかり、六半時なり

五月

廿七日 八半時出宅、細越中殿へ相越、帰宅暮六半時過也

六月

二日 九半時出宅、平服細川とのへ相越、終日誹諧之連歌、歌仙二卷全  
備、帰宅袴斗り六半時也

天明四年

八月

四日 出かけ居間着坐、崇福寺御当日代参帰受之、武兵衛也、

五半早出宅、着用袴、為登 城前主殿との・出羽とのへ相越、夫より細川とのへ時候見舞、秋元とのへ時候見舞、夫より中屋敷物見  
俳階（諧）、大町連馬来る、帰宅夜四時過なり



天明期に入って、銀鷺は、以前ほどではないが俳諧活動を行っていることがわかる。重賢の点取俳諧活動については、細川家・真田家双方の点取俳諧集から、菊貫もしばしば重賢（花裡雨・華裡雨）と一座していることがわかっている。<sup>(21)</sup>これ以外にも「終日十評之俳事有之」（天明四年へ一七八四）六月十日、「中屋敷物見<sup>二</sup>誹諧」（同九月四日）などの記事がある。しかし、天明四年（一七八四）九月十日が最後の句会記事となっている。句会記事の減少と反比例して歌会記事が増加している。天明八年（一七八八）の姫路帰藩の旅の道中でも歌を詠んでいるが、句作は行っていない。

なお、『宴遊日記』で菊貫について記されるのは、安永二年にはじまり、安永三年をピークとして、次いで多いのが、安永七年である。そこからは点取俳諧をめぐるやりとりが頻繁に行われており、菊貫が銀鷺とともに盛んに米翁に俳諧指導を受けている様子が伝わるが、安永八年以降、天明年間にいたると、点取俳諧のやりとりが見られなくなる。このことは『玄武日記』の菊貫の点取俳諧記事が安永八年以降みられなくなることと一致する。

以上見てきたように、『玄武日記』と『宴遊日記』を並べてみると、菊貫と十五歳年少の銀鷺とが、安永二年から七年にかけて集中的に交遊し、米翁の俳諧サロンのメンバーとして盛んに行き来している実態がはっきりと見えてくる。

## 六 まとめ

真田幸弘の文学活動の全体像を整理した上で、安永年間の点取俳諧活動及び酒井忠以との交遊関係について考察した。『宴遊日記』『玄武日記』からは、菊貫が俳諧をめぐって大名俳人と交流していたことがわかる。両日記とも記述量は膨大である。さらに詳細に日記の記事を検討することに

よって、大名俳諧の実態がより一層明らかになることが期待される。幸弘の文芸活動が、寛政年間の和歌活動に移ったのち、再び文化年間に俳諧活動に集中していく様相についても、今後、調査・研究を進める必要がある。

## 註

- (1) 「翻刻 菊貫著『旅つゝら』」『近世文芸研究と評論』第56号、一九九九・六。
- (2) 「翻刻 青葉蔭」『近世文芸研究と評論』第59号、二〇〇〇・一。
- (3) 「松代」第17号（二〇〇四・三）から第21号（二〇〇八・三）に掲載。なお、『松代』は真田宝物館HPより閲覧可能。また井上氏らの研究成果は、報告書『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究』論文篇第一部・資料篇第二部（二〇〇八・三）の二冊にまとめられている。
- (4) 「真田幸弘の俳階 枚摺」（『江戸文学』第25号、二〇〇二・六、ぺりかん社）。
- (5) 「真田幸弘の俳階―追善集『ちかのうら』」（『松代』第26号、二〇〇三・三）。
- (6) 『和漢比較文学』第46号、二〇一一年。
- (7) 錦仁編『中世詩歌の本質と連関』（二〇一一年・五、竹林舎）所収。
- (8) 真田宝物館展示図録『文人大名真田幸弘とその時代』（二〇一一年・九）所収。
- (9) 「松代藩第六代藩主真田幸弘の文藝」URL <http://kikutsumura.com/>
- (10) 資料名が『年籠』となっているものを掲出した。『年籠』の中に「年籠白韻」が含まれている場合は除いた。
- (11) 天明四年版『蘇明山莊発句藻』（翻刻は日本俳書大系『天明名家句選』一九二七・三、日本俳書大系刊行会）の写し。天巻とは別筆。お、真田宝物館には『蘇明山莊発句藻』とは内容の異なる『米翁子句藻』（写本）が伝来する。伊藤善隆「翻刻『米翁子句藻』」（『近世文芸研究と評論』第57号）参照。
- (12) 玉城司・小幡伍・平林香織により、以下に翻刻の一部を掲載。「松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく嶋』の紹介と翻刻（一）」（『長野県短期大学紀要』65

号、二〇一〇・二二二、「同」(二)「清泉女学院大学紀要」第8号(二〇一〇・二二二)、「同」(三)「近世文芸研究と評論」第80号、二〇一一・一六。

(13) 山中さゆり「真田家文書目録編成試論―研究の現状と展望―」(『松代』第21号、二〇〇八・三三)、同「真田家の典籍目録について―国文学研究資料館所蔵書目を題材に―」(『松代』第25号、二〇一二・三三)、原田和彦「真田家における典籍の集積と流出」(『真田家伝来の典籍整理の方向―松代真田家別邸とのかかわりから―』(ともに『松代』第23号、二〇一〇・三三)等参照。

(14) 幸弘自筆の『菊島』とは別筆でありながら、「天真院様御筆文化四年」と書かれた帳票がはられ、4ではじまる分類記号を持つ『菊の分根』がある。これは、題箋に「辰」とある干支を、文化四年と勘違いしてしまったためである。実際は、安永二年の辰年をさすことが、句上げに書かれた年号から明らかである。

(15) 「柳沢米翁(米翁)筆『宴遊日記』菊貫(真田幸弘)関係記事抜粋」(真田宝物館展示図録「文人大名真田幸弘とその時代」二〇一二・九)。

(16) 「酒井宗雅の茶の湯と交遊」(『淡交』第66・9号、二〇一二・九)。

(17) 『玄武日記』の引用は、すべて『城郭研究室年報』第12〜20号、二〇〇三・三〜二〇一一・三三)所載の加地宏江らの翻刻に拠る。

(18) 真田宝物館展覧会図録「大名の旅松代藩の参勤交代」(二〇一〇・九)に願書の控「甲州路御旅行御伺控」が掲載されている。

(19) 加地宏江「『玄武日記』にみる酒井忠以」(『城郭研究室年報』第21号、二〇一一・三三)参照。

(20) 『蘇明山荘発句藻』の引用は、日本俳書大系『天明名家句選』(一九二七・三三、日本俳書大系刊行会)所収の本文に拠る。

(21) 白石悌三「細川重賢と江戸座点取俳諧」(『同(承前)』(『福岡大学日本語日本文学』創刊号、一九九一・九、『同』第3号、一九九三・九)、細川護貞監修出水叢書12『俳諧集』(一九九六・六、汲古書院)参照。

「玄武日記」幸弘関連記事抜粋

安永五年丙申

正月

十日 真田伊豆守より両袖入の袋かりに来る、返事代筆、即刻遣入、連馬落巻は兼而遣し候旨申遣入事

十六日 菊貫より手紙来ル、阿達屋丸、通馬巻、七折尺角之事、麻の上々始助故

廿四日 玉馬より菊貫廻し来ル事年明上下始助故、菊貫より小子落巻之樽雲の三百員一巻到来、且十二月七日会之十評詠草かし遣入事、即酬也

二月

廿八日 孔阜より手紙来ル、右之返事に、きく貫年籠の点附廻状添遣入

朔日 菊貫へ手紙遣入事

五日 きく貫より手紙来ル、即酬并袖入かし遣入

七日 菊貫より手紙、巻来ル事

廿日 菊貫より手紙来ル、袖入帰ル、右之返事に此程の巻引墨おたし遣入、菊貫より手紙来ル事

廿一日 菊貫へ手紙遣、巻添并回章・詠草遣入

廿二日 菊貫より手紙来ル、即報酬遣入事

三月

六日 菊貫より手紙一通并廻状巻通到来、返事代筆、廻状巻覽之旨□□かけ、祇井へ相違入事

十二日 菊貫より手紙来ル、同断(代酬遣入事)

廿八日 右近殿・出羽殿より正木志摩守・河野吉十郎・村上三十郎へ渡され候旨二而、松越中・真伊豆触レ頭ニ而廻状到来、伝右衛門見する、文言左之通、  
当四月日光御社参二付、右道中筋四月朔日より同晦日迄、御用外諸向鐘人馬は無之候間、其旨可相心得候、  
右之趣向々為心得可被達候

四月

六日 真伊豆・まつ江中より佐渡殿被渡候よしに而、大屋遠近承の旨廻状巻通

到来

九日 菊貫より手紙到来、即酬遣ス事

廿三日 明朝菊貫へ遣ス可旨、手紙廻巻一蔵渡、事

廿四日 菊貫より返事到来之事

菊貫より手紙来る、代酬遣ス事

菊貫より廻し来る事

廿五日 菊貫へ廻し遣ス事

廿七日 菊貫へ廻し遣ス事

廿八日 真田伊豆留守居迄、大目付より達シ有之ニ付而、差出ス書付さのことし、

雅楽頭家族之内麻疹病人当時無御座候、若此已後來月十日迄ニ相煩  
候之者致出来候者其節可申上候、

酒井雅楽頭家来

庄野慈左衛門

五月

二日 菊貫より手紙到来、回巻来る、即酬遣ス事

六日 菊貫より手紙、巻来ル事

七日 五鳳・菊貫へ返事遣ス事

廿四日 昨日公菜より来る品、菊貫へ廻し遣ス事

菊貫より今朝のあいさつ手紙到来之事、返事不遣也

廿五日 菊貫へ廻巻・手紙遣ス事

三十日 明日登 當可致処、麻疹後腹痛ゐたし候ニ付登 城難致旨、来月番周防

殿・西豊後殿へ断届ゐたす事、右写右近殿へも用たのミ、大目付・御目  
付へも<sup>井</sup>飛騨殿且同席へ手紙、松泉州・奥大膳・戸采女・真伊豆へも申  
遣ス、返事到来之事

六月

二日 明日登城可致処、麻疹後腹痛に而、今以とく無之候ニ付仕難致旨、月  
番周防殿・豊後殿へ届書き出ス、右之写右近殿へさし出ス、右使者半蔵勤  
る事、

右ニ付同席松泉州・真伊豆・奥大膳・戸采女へ手紙遣ス、返事来る伊豆は断に而、城不致す申こし

十日 菊貫へ手紙、回巻遣ス事、  
井二書中見候、亦も遣ス事

十一日 菊貫より返事来る事

廿日 菊貫より暑中見舞手紙<sup>井</sup>有来る、代酬遣ス事

廿六日 五鳳・祇井・菊貫・菊鳳へ手紙遣ス事菊貫より返事来る

八月 (幸弘は参勤交代のため八月十九日江戸出發、翌安永六年六月五日江戸帰府)

朔日 菊貫より手紙到来、即酬遣ス事

二日 菊貫へ手紙、巻遣ス事

菊貫より返事、巻来る事

十一日 手紙四通、案司奉行綱五郎へ渡す

寂連院様

日光より土産之品  
千鶴之

松薩州

關中山茶子

秀井

病氣見舞として、  
肴箱梅袋札にさかな

さくつら

同断

右之さし遣ス事

大塚・菊貫・秀井<sup>井</sup>薩州より返事来る事

十五日 太素・菊貫・甘棠・秀井・五鳳・サロシナド同し、ことくくすりもの  
一枚あるいは二枚<sup>井</sup>おくる

田毎・米翁・菊貫・太素・甘棠より

十一月

十八日 菊貫より手紙、即酬遣ス事

十二月

十四日 仙台<sup>井</sup>菊貫、十六日の日附寒見舞手紙出之、勝右衛門へ渡ス事、

安永六年

一月

五日 菊貫より返事来る事

十七日 菊貫より年始状来る事

十八日 五時半出宅、着用（紫、色七、いろ、麻半）、左之通勤る、

松千太郎・土美濃・岡主税・真伊豆・石近江・京老岐・森紀伊・伊

遠江・内因幡・堀若松・天真寺（長上）之事、直（二）其服（二）曹溪寺（後之者）、畢

而又候はしめの服（二）着かへ、間下総・保彈正・松山城・黒千之助・

有中務・松薩摩・遠和泉・諏安芸・青甲斐・水左近・仙越前・相

老岐・木千勝

廿日 菊貫より年始状到来、返事認綱五郎へ渡（ス）事

八月

六日 菊貫へ手紙遣（ス）、返事来る事

七日 菊貫へ手紙遣（ス）事、返事来る事

十二日 菊貫へ手紙遣（ス）事、返事来る事

十五日 明月のすりもの左之通遣（ス）事、何も返事来る、

菊寿（一）院様へ（二）の歌（三）、（四）米翁・秀井・甘棠・和調・米徳・菊貫（五）

十七日 菊貫より手紙来る、即遣（ス）事（上中）

九月

十一日 秀井より手紙、菊貫より手紙、何も代酬遣（ス）事

十三日 菊貫より手紙、出産よろこひ着来る、甘棠より同断、何も即酬遣（ス）事

十六日 奥平旅中より書状来る、染井・かし橋へ手紙（ス）事、何も返事来る事、菊

貫答礼着、以手紙遣候、返事来る事

十月

十五日 菊貫へ手紙遣（ス）、返事来る事

十一月

廿三日 菊貫子（真因伊豆守殿）

かちよりそゆく播磨路に越き給ふその国の守の首途を寿きまらせて

松の春むかへに君か旅出かな

十二月

十九日 今日年籠百韻催之（座三、一藏、太次郎、才六、又兵衛、市之端、島登、海仙）

二十評

米翁子・菊貫子・甘棠子・祇井子・白臈子・存義・鶏口・在播・祇徳・田（一）・可（二）・常仙・宗梅・葵足・菊堂・白頭・保牛・連馬・米叔・□建

安永七年

二月

十四日 此華宮、寂照院様・寿・菊貫・白臈・甲長・仙台より手紙両通来る事（並手紙）

十五日 白臈・菊貫・大塚・縫殿・仙台への返事、才六へ渡（ス）事

六月

十九日 柏支（後）・菊貫・太素（五）手紙遣（ス）、何も返事来る

廿三日 珠成・米翁・三花・延磨・華程・雨甘枕・菊貫・兔万呂へ手紙遣、返事来る事

廿六日 菊貫へ手紙、返事来る事、内蔵へ手紙遣（ス）事

廿八日 為暑中見廻左之通手紙遣、返事来る事

祇井・米翁・菊貫・秀井

七月

朔日 内蔵・菊貫へ手紙遣（ス）事、内蔵は返事来る事

五日 菊貫より返事来る事

十一日 菊貫へ手紙遣、返事来る事、あの方よりも暑気見舞着、手紙来る、返事遣（ス）事

十四日 菊貫・三花より手紙、代酬遣（ス）事

十八日 菊貫・兔万呂より手紙来る事

八月

十日 菊貫より手紙、即酬遣（ス）事

十二月

十二日 菊貫より返事来る事

安永八年

二月

朔日 五時半出宅、左之通勤、本伊予・山修理・松日向・真伊豆・水日向・水



但馬

十四日 産褥<sup>ニ</sup>付明日登 城不致旨、月番はしめ例之通届ゐたず、同席<sup>ニ</sup>松平隠

岐守・松平和泉守・松平甲斐守・真田伊豆守へ切紙遣之事、何も承知之旨返事来る

天明三年

八月

廿九日 大乘院様御靈前へ代拜、於崇福寺武兵衛勤之、明日登 城断之旨月番老中へ相達、来月々番へとの指図<sup>ニ</sup>付、来月々番へ相達、同席小左京松甲斐・真伊豆へ申遣、大目付・大目付へも申遣ス

天明四年

正月

三日 七時過登 城、着用<sup>の</sup>儀<sup>ノ</sup>、御玄闕上り四之間へ相越、大目付河野信濃守召出しの名まへ書付之後暫有之、御目付末<sup>喜左衛門参り</sup>、御礼之順書見せ直<sup>ニ</sup>坐付候様申聞る、前側、井掃部・松讚岐・立左近・酒雅楽・松甲斐・阿のと・松越中・真伊豆、右九人<sup>例</sup>に並フ、暫有之<sup>而</sup> 出御、御嘉例御盃事相濟、御流頂戴はしまる、立花左近将監頂戴相濟、雅楽守罷出<sup>る</sup>、御酌中<sup>御酌</sup>、但此節扇ハ四之間着坐之処に抜置候事、暫有之、月番主殿とのエシヤクに<sup>而</sup>御前へ出る、御酌<sup>御小侍雅楽頭</sup>、御盃ハ御長柄にのり有之、御盃とりいた、きお酒うけのミ、はしめの処にさし置候事、又もとのセきへ帰坐、何レも肩衣<sup>ツ</sup>と有之、かた衣とりうしろ上置候事、入御後御三家調しい済、溜詰大広間衆調相濟而、同席侍従・四品一同、跡同席諸大夫一同に而謁、退出、五時過也、廿八日 四品以下小笠原左京大夫・酒井雅楽頭・松平甲斐守・真田伊豆守、右五人也、所太夫筆頭戸沢主計頭

二月

十五日 今日四品以上同席左之通也、

四月

朔日

小笠原左京大夫・酒井雅楽頭・松平甲斐守・松平越中守・真田伊豆守 五時前着坐、月並之礼受之、五之御太鼓<sup>ニ</sup>登 城、御玄闕上り席へ相越、暫有之、御目付池田修理参り、席をひらき候様申聞る、雅楽頭・甲斐守・伊豆守・越中守席をひらく、四品以下一同之被 仰渡有之、月番主殿頭達之、右濟而覆坐、又候池田修理<sup>御錠口ヲ</sup>達ス、松之御廊下へ相廻る、順々御礼はしまる、松平相模守御礼申上、次<sup>ニ</sup>雅楽頭罷出る、披露板倉伊勢守、直<sup>ニ</sup>退出、西丸へ登 城、於<sup>ニ</sup>之間謁阿部能登守、添土井大炊守也、退出四時過

七日

五時出宅、着用<sup>儀</sup>、稲葉越中守亭へ登 城前、夫より真田伊豆守亭へ時候見舞、森元町雛見物、帰宅九時過なり

五月

朔日

五時前着坐、月並之礼受之、御太鼓前登 城、着用<sup>儀</sup>、御玄闕より席へ相越、無程御目付<sup>御主筆</sup>参り御錠口を達、何れも桜之間へ相廻る、雅楽頭・甲斐守・越中守・伊豆守以下同席、諸大夫大廊下<sup>ニ</sup>着坐、無程御白書院出 御、順々御礼はしまる、大広間侍従有馬中務大輔次<sup>ニ</sup>御礼申上ル、披露御奏者堀田相模守、畢而退出、西丸へ登 城、於大広間<sup>ニ</sup>之間、謁阿部能登守、添松平和泉守、大目付大谷遠江守・御目付兩人侍坐、同席侍従・四品一同以下諸大夫五人つゝ、謁奏者番、退出也、九時前

六月

朔日

<sup>本節之、本年より着坐之前節</sup> 六半時過居間着坐、月並之礼受之、五時登 城、着用<sup>儀</sup>、御玄闕より席へ相越、暫有之、御目付池田修理参御錠口を達、今日より四品以下一同也、席へ鉄棒出る、如図、

大廊下御障子ひらき、大廊下・大広間・四品之次<sup>ニ</sup>間三尺斗あけ同席、

侍従・四品着坐也、

小笠原左京大夫

酒井雅楽頭

松平甲斐守

松平越中守  
真田伊豆守

右之通着坐、酒井左衛門尉は不快<sup>二</sup>罷出、暫有之、御白書院 出御、  
順々御礼はしまる、表方侍従御礼相濟、小笠原左京太夫次<sup>二</sup>御礼申上る。披露  
御奏者番松平和泉守<sup>二</sup>退令召願ハ、大旨侍従御禮、畢而退出、直<sup>二</sup>西丸へ登城、大広間<sup>二</sup>之  
間<sup>二</sup>而御奏者番板倉伊勢守<sup>二</sup>謁、そへ土井大炊頭、退而退出、西丸之節は<sup>二</sup>侍従<sup>一</sup>  
禮也<sup>一</sup>

天明六年

正月

三日 通御之節一同御目見申上<sup>レ</sup>、直<sup>二</sup>帝鑑之間御縁通、柳之御廊下・柳之間・大  
広間四之間例之席相廻る、前例如左

松肥後 溜間中将

井玄蕃 溜間少将

松讚岐 同

酒雅楽 同侍従

小左京 帝鑑侍従

丹加賀 大広間四品

酒左衛門 帝鑑四品

松甲斐 同

松越中 此度別席御礼被、仰付、於溜間御通かけ御目見へ相濟、同

席之跡へ付、坐順ハ此通可並居候

真伊豆 帝鑑四品

天明七年

六月

十六日

今日頂戴 御のし、  
一、頂戴の順如左、

井伊掃部・井伊玄蕃・酒井雅楽・松平周防・牧野越中・水野出羽・鳥  
居丹波・榊原式部・有馬兵部・中条山城・戸田土佐・横瀬駿河・六角伊  
予・有馬修理・中条河内・松平大和・松平筑後<sup>十左衛門</sup>・阿部伊勢・酒井左衛  
門・真田伊豆・堀田相模、

右洛而入御恐悦申述、大広間杉戸より退出九時前

天明八年  
正月

三日

夕方七時供揃<sup>二</sup>着用<sup>のし目</sup>、七半時登 城、御目付<sup>多門次郎</sup>申上を達、御礼書  
見する、括を解、御錠口承り、鯉之御杉戸前御上段之方<sup>ラ</sup>上<sup>ミ</sup>に居並フ、大  
広間へ 通御かけ御目見仕、夫より帝鑑間御通、柳之御廊下、大広間へ相  
越、前側左之通居並フ、

松平讚岐守 溜中将

立花左近将監 大広侍従

酒井雅楽頭 溜侍従

井伊玄蕃頭 同断

小笠原左京大夫 帝鑑侍従

立花出雲守 大広間四品

松平甲斐守 帝鑑四品

真田伊豆守 同断

右八人

寛政二年

正月

三日

六半へ三寸之目覚、若水以下二日之通り<sup>のし目</sup>、居間書院<sup>三</sup>三献之祝有之、  
如例年初茶逾好庵<sup>小佐藤</sup>、七時供揃<sup>二</sup>月番供揃承、登 城、着用<sup>のし目</sup>、  
<sup>先年ハ七半時登、</sup>御目付<sup>井上國書</sup>申上を達、各く、りを解、御錠口承り鯉之御杉戸  
<sup>城、当年七半前也、</sup>前御上段の方を上<sup>ミ</sup>に居並ラフ、大広間へ 通御かけ御目見<sup>申上ル</sup>、夫よ  
り帝鑑の間御縁通、柳之御廊下通り大広間へ相越候、前側左之通居並フ、

松平讀岐守 溜中将  
松平隱岐守 溜侍従  
酒井雅楽頭 同断  
井伊掃部頭 同断  
小笠原左京大夫 帝鑑間侍従  
藤堂大学頭 大広間四品  
松平甲斐守 帝鑑間四品  
真田彈正大弼 同断  
右八人

\*本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）課題研究番号22520252「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧の研究」（二〇一〇～二〇二二年度）の成果によるものである。また、資料の閲覧・掲載に際して、長野市教育委員会文化財課松代文化施設等管理事務所（真田宝物館）のご高配を得た。記して感謝申し上げます。

別表1 幸弘文芸資料

和暦	西暦	年齢	和歌関係	俳諧関係	賀集	幸弘年譜	備考
元文5年	1740	1				松代にて誕生、幼名豊松	
寛保2年	1742	3					寛保の大洪水、横田騒動(足軽出仕拒否・領民一揆)
宝暦2年	1752	13				家督相続、幸豊に改名	
宝暦3年	1753	14	幸弘公御自詠岡部衛士加茂真淵点*				俚約令(以後在任中97回)
宝暦4年	1754	15					富士山噴火
宝暦5年	1755	16				従五位下伊豆守	
宝暦6年	1756	17				松代初入封	
宝暦7年	1757	18					恩田木工勝手方御用兼帯、千曲川大洪水
宝暦8年	1758	19					稽古所設置、菊池南陽・岡野石城招聘、以後在任中文武奨励令13回
宝暦10年	1760	21				松平定賢娘定子(真松院)と結婚	
宝暦12年	1762	23		『旅つゝら』(俳諧紀行)		朝鮮使節接待役	恩田木工没
宝暦13年	1763	24		『菊の分根』(含明和元年) 1冊		日光東照宮に將軍の代参	
明和元年	1764	25					
明和2年	1765	26					千曲川大洪水
明和4年	1767	28				松代居館花の丸御殿建造	
明和6年	1769	30					真淵没
明和8年	1771	32		『菊の分根』2冊(含明和9年)			
安永元年	1772	33		『菊の分根』2冊			
安永2年	1773	34		『菊の分根』4冊、『総評一万句』10冊(欠本2冊)			柳沢信鴻致仕
安永3年	1774	35		良夜一枚摺			定信白河藩主松平定邦婿養子
安永4年	1775	36		高点句集『詭遇馴』4冊(安永4~8)(第二編欠本)			
安永5年	1776	37					
安永6年	1777	38					
安永7年	1778	39		『引墨到来覚』(~天明元)			
安永8年	1779	40		名月一枚摺	『むら竹』、『にひ杖』		
安永9年	1780	41		春興一枚摺(個人蔵)			
天明元年	1781	42		夏興一枚摺(個人蔵)		幸豊を幸弘に改名	天明の大飢饉(~天明8)
天明2年	1782	43		『引墨到来覚』(~寛政5)			
天明3年	1783	44		後月一枚摺、半秋一枚摺、春興一枚摺(個人蔵)		従四位下	定信第3代白河藩主、従四位下、浅間山噴火
天明4年	1784	45					
天明5年	1785	46		『引墨到来覚』(~寛政元)、春興一枚摺(雲英文庫)		井伊順介と養子縁組(真田幸専)	
天明6年	1786	47					定信老中
天明7年	1787	48			『ともづる』上下	海津城に双鶴飛来	定信老中首座
天明8年	1788	49		「後月」一枚摺		弾正大弼	
寛政元年	1789	50			『わかみとり』、『御年賀御祝儀一許』	江戸城大手門番(~寛政9迄4回)	
寛政2年	1790	51	『和歌詠草』2冊	歳旦一枚摺(雲英文庫)		従四位下右京大夫	日野資枝おゆか宛返書この頃か
寛政3年	1791	52	『和歌詠草』5冊	春興一枚摺(個人蔵)			
寛政4年	1792	53	『和歌詠草』2冊、和歌入門誓詞条*		『むらたけ』	日野資枝入門、竹千代生誕の御篋刀役	
寛政5年	1793	54	『和歌詠草』3冊、御和歌詠草折紙7冊、	『みずかゞみ』** (宝暦13より30年間の発句集、乾坤2冊の内坤なし)、「追悼米翁子追悼卒後へ送る」短冊、『引墨到来覚』(~享和元)	『はしだて』		信鴻没、定信老中致仕



和暦	西暦	年齢	和歌関係	俳諧関係	賀集	幸弘年譜	備考
寛政6年	1794	55	『和歌詠草』2冊、和歌入門誓詞条*				
寛政7年	1795	56	『和歌詠草』3冊、御和歌詠草折紙7枚	歳旦一枚摺(雲英文庫)			
寛政8年	1796	57	『和歌詠草』3冊	歳旦一枚摺(雲英文庫)			
寛政9年	1797	58	『和歌詠草』				
寛政10年	1798	59	『和歌詠草』、二条家より来題2通			8月21日致仕	幸専第7代松代藩主
寛政11年	1799	60			『千とせの寿詞』、 『御ことほきの記』、『耳順御賀日記』、短冊帖4冊		
寛政12年	1800	61		歳旦一枚摺(雲英文庫)			
寛政13年	1801	62		『菊の筵』*歳旦一枚摺(雲英文庫)			
享和元年	1801	62		『菊島』(含享和2年)、『引墨到来覚』(~文化元)			日野資枝没
享和2年	1802	63					
享和3年	1803	64		『菊島』3冊、『連月定会百韻』3冊			
享和4年	1804	65		『菊島』4冊、『年籠百韻』3冊、歳旦一枚摺(雲英文庫)			
文化元年	1804	65		『菊島』15冊			
文化2年	1805	66		『菊島』17冊、『連月定会百韻』8冊、『年籠百韻』、『百八拾韻』、『鶉合』、点取帖8冊、歳旦一枚摺(雲英文庫)			
文化3年	1806	67		『菊島』18冊、『連月定会百韻』6冊、『菊合年籠』、『引墨到来覚』(~文化5)、『俳諧引墨高点留』、『年籠ヨリ到来卷覚』			
文化4年	1807	68		『菊島』22冊			
文化5年	1808	69		『菊島』18冊、『定会百韻』、			
文化6年	1809	70		『菊島』9冊、『定会百韻』3冊(含文化7年)、『俳諧引墨高点留』	『千とせの寿詞』、 『御ことほきの記』、『佳苑篇』		
文化7年	1810	71		『菊島』15冊、『俳諧引墨高点留』、『評物定会入句』、『手前定会入句点附』、『菊貫公句稿』(文化7~11)**			定信白河藩主致仕
文化8年	1811	72		『菊島』5冊			学問所設置、林单山招聘
文化9年	1812	73		『他連百員側連』、『年籠御高点書留』、『青葉蔭』(俳諧紀行)、『青葉蔭』・『湘南絵巻』(旅絵巻)、歳旦一枚摺(雲英文庫)			
文化10年	1813	74		『春季発句合』、『御高点書留』			
文化11年	1814	75		『菊島』4冊、『万句入句控』、『句集』			
文化12年	1815	76		歳旦一枚摺(雲英文庫)、追善集『ちかのうら』		8月3日没	井上正甫娘雅姫(幸弘孫娘)・松平定信次男幸善が幸専と養子縁組
文化13年	1816	没1	岩下清酒編遺稿集2(寛政七年~文化12年)				幸善改め幸貫・雅姫婚儀
年代不明	年代不明		『花洛の草結』(自筆詠草)、『天真院様御歌京都日野家より御点引』	『高点御書留落葉庵御筆』(信安)2冊、『御句集』(信安)*、点取帖3冊、良夜一枚摺、後月一枚摺、一枚摺4枚(霜天/歳旦/后月/紅葉、雲英文庫)	自他の年賀集等贈答短冊2,000点弱		

\*資料館寄託 \*\*東京大学付属図書館 \*\*\*広島大学付属図書館

別表2 『菊島』より

A 壬正月二十五日「俳諧連歌百行」催主青山（享和2年〈1802〉）

表紙記載 事項	連衆	子絃	有斐	如圭子	芦風	菊貫	梅足	執筆
		馬隠	雲牙	牛如	午睡	完路	三樂	
	点者	青山持	子鷹	陸馬	冬映	得器	双鳧	
		南部坂持	仏外	石鯨	崑山	吾山	為大	

	天		地		人	
点者	句上記載	集計値	句上記載	集計値	句上記載	集計値
子鷹	如圭子68	如圭子54	公30	公23	三樂29	三樂29
兎堂	三樂54	三樂54	公37	雲牙37	雲牙30	公34
陸馬	如圭子52	如圭子53	公43	公36	午睡30	午睡30
双鳧	子絃36	子絃36	公32	三樂30	如圭子30	如圭子30
得器	完路44	完路44	午睡39	午睡39	梅足34	梅足34
石鯨	子絃43	子絃45	午睡40	午睡40	雲牙37	雲牙36
仏外	子絃51	子絃61	雲牙38	雲牙42	芦風34	芦風34
崑山	子絃41	子絃	三樂39	三樂39	午睡38	午睡38
吾山	午睡43	午睡46	完路38	完路38	公34	公29
為大	馬隠45	馬隠40	三樂40	三樂40	雲牙38	雲牙33

B 亥閏正月二月四日満尾「百行稿」催主白日庵（享和3年〈1803〉）

表紙記載 事項	点者	升来子持	娠水子	涼山子	素外	得器	李岱
		此方持	甘棠子	甲長子	兎堂	陸馬	為大
	連衆	素文	素飛	升来	菊貫	雲牙	牛如
		梅足	馬隠	太路	鶴媛	執筆	

月花折二点増し

	天		地		人	
点者	句上記載	集計値	句上記載	集計値	句上記載	集計値
甘棠子	太路46	太路44	鶴媛35	鶴媛40	素飛32	素飛22
甲長子	牛如50	牛如55	太路43	太路48	菊貫42	菊貫38
兎堂	菊貫72	菊貫70	升来41	升来48	梅足40	梅足40
陸馬	梅足39	梅足44	太路38	牛如33	升来48	素文36
為大	菊貫66	梅足47	升来46	升来46	梅足45	牛如41
升来子 娠水子	鶴媛52	鶴媛54	升来50	升来48	菊貫26	菊貫26
涼山子	鶴媛74	鶴媛77	菊貫57	菊貫51	梅足54	梅足49
素外	太路41	太路48	升来40	鶴媛42	鶴媛32	升来38
得器	升来58	升来61	菊貫48	雲牙44	鶴媛40	素文40
古梁 李岱	升来58	升来63	鶴媛35	鶴媛39	菊貫34	牛如38

\* 高点者上位三名を天・地・人として記載した。

\* 表中の「公」は菊貫を指す。

\* 表中の網掛けは順位が入れ替っているもの。

別表3 菊貫と関係する俳諧大名

俳号	国名	藩名	代数	氏名		官職	別号	没年
吐芳	陸奥	三春藩	7代	秋田信季	よしすえ	山城守	湖東(凍)	文化10
亀齡	陸奥	湯長屋藩	9代	内藤政環	まさあきら	播磨守		天保7
畔李	陸奥	八戸藩	7代	南部信房	のぶふさ	伊勢守	花咲亭 五梅庵	天保6
揚志	陸奥	盛山藩	4代	松平頼慎	よりよし	大学頭		文政13
凡兆	出羽	庄内藩	7代	酒井忠徳	ただあり	左衛門尉	一秀 風琴 三千春 春歌亭 連樹観	文化9
祇井	出羽	松山藩	4代	酒井忠崇	ただたか	大学頭/石見守	星々庵 祇川	文政7
松花	出羽	松山藩	5代	酒井忠禮	ただのり	大学頭		文政4
僊峨	常陸	府中藩	6代	松平頼濟	よりすみ	播磨守		天明4
僊峨	常陸	府中藩	7代	松平頼前	よりさき	右京大夫	葵薬堂	文政7
吉水	常陸	府中藩	8代	松平頼説	よりひさ	播磨守		天保4
素麿(丸)	下野	烏山藩	5代	大久保忠成	ただしげ	佐渡守		嘉永4
蓬洲	下野	足利藩	5代	戸田忠喬	ただたか	大隈守		天保8
素秧	上野	沼田藩	7代	土岐頼布	よりのぶ	山城守		天保8
鶴乗	上野	吉井藩	5代	松平信成	のぶなり	左兵衛督		寛政12
鶴林	上野	吉井藩	6代	松平信充	のぶみつ	大蔵大輔		享和3
北平	上野	小幡藩	2代	松平忠福	ただよし	采女正		寛政11
籬道	上野	小幡藩	3代	松平忠恵	ただしげ	宮内少輔		文久2
月扇	安房	佐倉藩	2代	堀田政順	まさなり	相模守		文化2
畦社	武蔵	忍藩	5代	阿部正充	まさちか	豊後守		安永9
和橋	駿河	沼津藩	9代	水野忠成	ただあきら	大和守/出羽守		天保5
文車	駿河	小島藩	5代	松平信義	のぶよし	丹後守		享和1
秀井	三河	西尾藩	3代	松平乗祐	のりすけ	和泉守		明和4
珠成	越後	三日市藩	4代	柳沢里之	さとゆき	信濃守	一滴庵 星羅	文化1
錦車	越前	福井藩	12代	松平重富	しげとみ	伊予守		文化6
花明(花眠)	近江	水口藩	4代	加藤明堯	あきたか	能登守		天明5
三花	摂津	麻田藩	9代	青木一貫	かずつら	出羽守/甲斐守		天明6
亀文	摂津	尼崎藩	3代	松平忠告	ただつぐ	遠江守	一桜井	文化2
亀幸	摂津	尼崎藩	4代	松平忠宝	ただとみ	遠江守	一桜井	文政12
驪龍	和泉	伯太藩	6代	渡辺春綱	はるつな	大学頭		文化7
清遠	志摩	鳥羽藩	4代	稲垣長統	ながつぐ	信濃守		天保10
李井	大和	柳生藩	8代	柳生俊則	としのり	但馬守	7代俊峯も同号	文化13
米翁	大和	郡山藩	2代	柳沢信鴻	のぶとき	美濃守	月邨所 蘇明山人	寛政4
米徳	大和	郡山藩	3代	柳沢保光	やすみつ	美濃守	八百庵	文化14
冬央	伊勢	桑名藩	4代	松平忠功	ただかつ	大外記/下総守		文政13
壺泉	但馬	豊岡藩	7代	京極高有	たかあり	加賀守		天保12
孔阜	播磨	明石藩	5代	松平直之	なおゆき	左兵衛佐		天明6
銀鷺	播磨	姫路藩	2代	酒井忠以	ただざね	雅楽頭		寛政2
玉助	播磨	姫路藩	4代	酒井忠実	ただざね	河内守		嘉永1
沾花(華)	播磨	赤穂藩	7代	森忠賛	ただすけ	美濃守/兵衛佐	林下庵	天保8
蘭兮	備中	成羽藩	7代	山崎義徳	よしのり	主税介		文化10
冠山(去留)	因幡	若桜藩	5代	池田定常	さだつね	縫殿頭		天保4
玉馬	因幡	鳥取藩	5代	池田重寛	しげのぶ	相模守		天明3
雪堤(淀)	出雲	松江藩	6代	松平宗衍	むねのぶ	出羽守	独楽庵	天明2
沾嶺	出雲	広瀬藩	8代	松平直寛	なおひろ	宮内大輔	梅月館	嘉永3
露朝	長門	長州藩	10代	毛利斉熙	なりひろ	大膳大夫	三夕堂	天保7
甘棠	伊予	今治藩	6代	松平定休	さだやす	河内守	四時庵 諱堯山	文政3
升来	肥前	島原藩	初代	松平忠恕	ただゆき	大和守		寛政4
斗来	肥前	島原藩	2代	松平忠馮	ただより	主計頭		文政2
花裡雨	肥後	熊本藩	8代	細川重賢	しげかた	越中守		天明5
如柳	肥後	熊本新田藩	6代	細川利庸	としつね	能登守		文化2
五鳳	豊前	小倉藩	5代	小笠原忠苗	ただみつ	右近将監	栖桐舎	文化5
絮水	豊後	日出藩	11代	木下俊懋	としまさ	主計頭		文政5
不鶯	豊後	府内藩	6代	松平近儔	ちかとも	長門守	太乙楼	天保11